

県委嘱「学力充実プラン推進事業」における豊川市の取り組みについて

1 はじめに

豊川市は、平成28年度、県より「学力充実プラン推進事業」の研究委嘱を受けました。この事業は、全国学力・学習状況調査をもとに、県から示された「学力・学習状況充実プラン」や「結果分析プログラム」を積極的に活用することで、豊川市の課題を明らかにし、その課題を克服するために市教委がプランニングを行い、そのプランに沿って各学校が教育改善を図るというものです。

2 豊川市の平成27年度の全国学力・学習状況調査結果の実態

平成27年度の全国学力・学習状況調査結果から、次のような課題がみえてきました。

- ・小学校では、国語も算数も全体的に平均正答率が低く、特にA問題が低い。
- ・全国平均と比べ、上位が少なく、中下位の人数が多い。正答数と人数の分布グラフでは、全体的に下位方向にシフトした形になっている。
- ・中学校では、国語も数学もほとんどの内容で全国を上回っている。しかし、上位と下位に二極化している学校があり、基礎学力に不安のある生徒がどの学校にもいる。
- ・小中学校とも、宿題に取り組む子は多いが、家庭での予習復習の時間が全国平均に比べ少ない。

3 課題を受けた市としての取り組み内容

明らかになった課題を克服し、さらに学力を充実させていくためのキーワードを、「**基礎基本の定着**」と「**わかる授業**」とし、以下の内容に取り組みました。

(1) 「**基礎基本の定着**」「**わかる授業**」を2本柱とし、各学校の取り組むべき課題に合った手だてを考えて実践する。

① 「**基礎基本の定着**」のための手だて…学校の実態に合わせた手だてによる

例) ・短時間学習(帯時間や授業のはじめ5分間)で、一人一人のレベルにあった繰り返し学習を行う。

- ・子どもにとってより効果的な宿題の出し方、予習復習や次の授業に生かすことができる家庭学習の工夫を図る。

② 「**わかる授業**」のための手だて…全校「**豊川の授業 16のポイント**」を活用

- ・「**豊川の授業 16のポイント**」から今年度重点的に取り組む項目を選び、現職研修等で共通理解を図り、授業改善に取り組む。
- ・県の「学力・学習状況充実プラン」を活用する。

(2) 推進校を指定し、外部講師等の招聘、授業研究会や講演会を開催して実践をすすめる。

- ・先進的な取り組みの紹介や、授業の指導を受け、市内全体に広げる。

(3) 取り組みと成果を集約

- ・取り組みと成果について、市教育委員会及び県義務教育課のWebページにて公開する。
- ・リーフレット等にまとめ、全校に配付し、共有、活用を図る。

4 実践概要

6月から2月にかけて以下のように実践しました。

(1) 市内全教員に「**豊川の授業 16のポイント**」を配付

昨年度末に豊川市現職研修委員会で作成した授業の基礎基本をまとめた「**豊川の授業 16のポイント**」と「**授業チェックリスト**」を市内全教員(1,100人)に配付した。常に手元に置いて、毎日の授業を見直したり、授業研究会などで活用したりするよう呼びかけた。

「授業チェックリスト」は、エクセルデータを配信し、各学校が自校の様子にあわせてカスタマイズできるようにした。

(2) 各校計画書提出(6月)

「自校の分析結果から見えてきた実態」を受けて「**基礎基本の定着**」「**わかる授業**」に係る具体的な手だてを学校ごとに考え、計画書を市教委に提出した。

※全校分を一覧表にまとめ校長会、教務主任会で配付し共有した。

No	学校名	分析結果から見えてきた実態	「基礎基本の定着」のための手だて	短時間学習 ミニ-月間 チェックリスト	持ち返し学習	家庭学習	2「わかる授業」のための手だて	豊川の授業 16のポイント																
								1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	
3	D小	<ul style="list-style-type: none"> 「授業を難しく感じます」が式の理解を促している。式の理解を促しているが、その理由が不明。 本物の正解を促さない。引例の意味を理解しにくい。式の意味が不明。 小人数の授業を主体に行うことやその理由が不明。授業の進め方の理解が難しい。 算数の問題文を理解して解く力が不足。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業や家庭学習で理解の促進をする機会が多く設定し、習得を図る。 適量の定着を図るために、連続テストを行う。 「式」の理解や理解を促す力を付けるために、ここまでの単元のドリルなどを活用する。 文章理解の基本でマインドとなる。式の意味を取りをさせる。授業を行う。 算数の授業の進め方に、習った内容を、問題解決を目的に行う。 応用問題では、考えをノートに書き、問題を指導する。 家庭学習時間では、算数×10分×10分程度に家庭にも練習が出来る。 卒業前までに、算数×10分程度に家庭にも練習が出来る。 家庭学習の習慣化を図る。 今後、家庭学習の準備などを検討していく。 				2	2										2						
4	D小	<ul style="list-style-type: none"> 「国語、算数ともに問題は、全学年平均より下がっている。読解学習にかかわっている状態。」 「国語、算数ともに問題は、全学年平均より下がっており、基礎基本の定着を図らなければならない。」 算数で、手しりやゲームをする時間が多い。全学年平均が多い。 家庭学習で自分で前書きを立てて読解している児童の割合は、全学年平均より低い。 	<ul style="list-style-type: none"> アクティブ・ラーニングを授業の中心に置く。 授業は別に自主学習ノートをとり、活用する。 読解書に例って家庭学習の準備を促す。 家庭学習の自主学習を、まずは算数×10分程度とする。 				2		2															
5	E小	<ul style="list-style-type: none"> 「国語は、算解的なレベルで、甲斐性が高い。算解的なレベルで、甲斐性が高い。」 「国語算数ともに、基礎的な問題のやり取りが少ないので、読解練習の必要性がある。」 「国語では、要素をつかみ、それを構造的にまとめることを学習している。」 「算数は、算数図、算数図、グラフに傾き、面積に傾きが見られる。」 「算数の問題はよく見えてくるので、「おついで」を併用した授業の取り組みが効果的である。」 	<ul style="list-style-type: none"> 算数算数なので、算数によって能力差が大きい。よって、個に応じた授業を必要とする。 「算」の授業では個別支援シートを活用する。 算数のほじりや付箋、課題、作業シートなどに例って学習の仕方を指導する。 「おついで」を併用した授業を通して、算数以外の内容の要素を捉えて書く力をつける。 					2																
<p>「国語や算数の問題が難しくなること、文章の理解を促せることができる。」「短時間学習(短時間の授業のほじり5分程度)で、一人一人のレベルがある。」</p>																								

(3) 推進校にて授業研究会の開催(6月20日・8月18日)

千両小学校の研究サブテーマ「温かい人間関係づくり」「基礎学力の向上」の手だてについて、臨床心理士 山口 力先生を招いて研修会を2回開催した。

(4) 授業力向上講演会(講師:岐阜聖徳学園大学 玉置 崇 教授)(8月26日)

「玉置流・授業力アップの秘訣」という演題で、わかる授業のための具体的な手だてや授業力アップの秘訣、主体的・対話的で深い学び(「アクティブ・ラーニング」)について教えていただいた。市内350名の教員が参加した。

(5) 推進校研究発表会(10月)

推進校において『心と学びの「根っこ」を育む～「温かい人間関係づくり」「基礎学力の向上」をめざして～』というテーマで研究発表会を開催した。豊川市内外から163名の教員が参加し、研修を深めた。

(6) 各校の取り組みのまとめを集約し、リーフレットや冊子等を作成(1月・2月)

各学校の取り組み(手だてと成果)をまとめ、市教委に提出。その中から、有効な手だてをリーフレットにまとめて市内全教員(1,100人)に配付した。また、全ての実践例を冊子にして各学校に配付したり、HPに公開したりして、事例の共有化を図った。

5 成果と課題

成果と課題については、以下のことが挙げられます。

- ・「**基礎基本の定着**」「**わかる授業**」というキーワードで、全小中学校で自校の結果を振り返る場を設けたことで、各校の具体的な手だてが明らかになり、事例を共有することができた。
- ・「**基礎基本の定着**」のための手だてとして、家庭学習の充実に着目し、**学校独自で家庭学習の手引きを作成し**保護者に配付する学校も増えてきた。今後は家庭学習にも目を向けて、市内で

情報を共有して、学校・家庭・地域が協力して子どもの学力向上に取り組んでいくことができるようにする。

- ・「**基礎基本の定着**」のための手だてとして、短時間学習や反復学習に取り組む事例が多くあった。これからの各校のモジュールの時間のあり方を考えるきっかけになり、今後のカリキュラム・マネジメントにつながっていくと考える。
- ・「**わかる授業**」のための手だてとして、「豊川の授業 16のポイント」「授業チェックリスト」を全教員に配付したことで、授業で大事にすることを共通理解することができた。また、教師がそれらを意識することで、授業の形態や子どもの様子が変わってきた(実践例参照)。毎年内容を見直しながら継続活用し、さらなる教師の授業力アップにつなげていく。
- ・「授業チェックリスト」は豊川市共有サーバーに入れておき、それを自在に取り出して作りかえることができるようにした。市内共通の形を**学校の実態に応じてカスタマイズ**できることは、たいへん意義があった。

6 おわりに

全国学力・学習状況調査の豊川市の実態から、「**基礎基本の定着**」「**わかる授業**」という2点に着目し、各校の課題にあった手だてを考え実践することで、めざす授業像が明らかになってきました。その授業の基本となる「豊川の授業 16のポイント」は、新学習指導要領の方向性で示されている、主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）を支える内容で、これからの豊川の教育の柱の一つとなっていくことと思います。今後も、豊川市の子どもたちが生き生きと楽しく学ぶことのできるよう「**基礎基本の定着**」と「**わかる授業**」に着目した実践を続けていきたいと考えています。